



Title	「第二言語を学ぶ時期と脳の関係」について
Author(s)	飛瀬マリア, ジュリア
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「第二言語を学ぶ時期と脳の関係」について

2018 年度大阪・サンパウロ姉妹都市交流事業招聘人材

飛瀬マリア・ジュリア

1. はじめに

この一文は、林田雅至先生のご退職を祝して、共有させていただいた貴重な時間を振り返るとともに、林田先生が日頃話しておられる「第二言語を学ぶ時期と脳の関係」に啓発され、それを契機として、書いていきたいと思っています。

この「思春期前(12 歳ころ)の第二言語習得」の経験や困難さ、また、そのような体験が現在の生活に与えたと思われる効果について回想しながら、具体的に書き留めておきたいと思います。

2. 林田先生との思い出話について

林田先生、この度はご定年退職おめでとうございます！

林田先生にお会いする機会があったのは、2019 年 2 月末、サンパウロ代表として「大阪・サンパウロ姉妹都市協会のプログラム」に参加する機会を得た時でした。このプログラムは、両市の関係を深め、ポルトガル語を学習する日本人学生と日本語を学習するブラジル人との間で文化的・言語的な交流を実現することを目的としており、大阪の街に出かけたり、数々の経験をしました。この旅を特別なものにしてくれた何人かの人々と出会うことができました。その中から、林田先生との思い出をご紹介します。

林田先生とはプログラムの歓迎会で初めてお会いしたのですが、ブラジル人留学生である私を温かく迎えてくださり、ブラジルという国だけでなく、ブラジルの病院や大学などとの交流や経験についてお話を伺うことができました。ブラジルやポルトガル語に興味を持っていて（ポルトガル語での会話も含めて）、相手国への関心の表われでもあるのですが、

ブラジルが地球の向こう側にもあることも知っていて、とても嬉しく思いました。

先生は、ブラジルの制度などについて、技術的・学術的レベルの高い知識をお持ちで、とても印象に残っています。それまでに会った人たちは、ブラジルの話をするとき、ステレオタイプに終始する人が多かったので、ブラジルの様々な要素を詳しく話してくれたことにとても興味を持ちました。

大阪大学訪問に際しても、再会する機会があり、法科大学院（私がブラジルの大学で学んでいた学科と同じ）の学生や教授を親切に紹介してくれて、とても嬉しかったです。キャンパスの様子や大学の運営、日本の学術・司法制度についての様々な説明を聞くことができ、大学の食堂(学食)で食事することまでできました。勉強になる話や楽しい話をたくさんして下さり、キャンパス内を歩いたことは、今でも鮮明に心に残っていて、現在の職場の人たちにもいつも話しています。

大学訪問の日は、大阪サンパウロ姉妹都市協会監事荒堀立夫さん(元・公益財団法人大阪国際交流センター情報企画部長)、大阪大学法学部国際公共政策学科2年生(当時)池本裕香さん(2019年G20開催時の阪大COデザインセンター推薦：代表語学ボランティア・リーダー格)と一緒に、林田先生ご自身が支援担当をされている大阪市日本語学習センター(大阪梅田駅前第二ビル6階)を訪問させていただきました。そこは、日本に来日や移住してきた外国人などに日本語を教える取り組みであることを知りました。そのプログラムを見学させていただき、学習者の皆さんともお話をさせていただきました。会場には、様々な日本語レベルの受講生が詰めかけ、先生も担当テーブルで直接指導をされていました。必要不可欠な取り組みだと思ったのを覚えていますし、こんな素敵なプロジェクトの設置場所に足を運べたことがどれだけ嬉しかったことでしょう!私は胸が熱くなりました。

ブラジルに戻ってからも、林田先生、大阪サンパウロ姉妹都市協会事務局長榎井貞次さんや理事櫻井悌司さん(旧大阪外国語大学スペイン科卒、長年JETROで海外大型イベント企画事業担当、現在ラテンアメリカ協会常務理事)とは毎年のようにメール連絡のやり取りをし、そして元交換留学生とも、オンラインミーティングやメールのやり取りを繰り返す機会があり、情報のアップデートが出来て、とてもためになっています。その際、日本の稀な苗字と一般的な名字についての興味深い会話をしましたが、個人的に参加していた私にとっては、とても興味深い情報でした。因みに、私の飛瀬姓は稀少価値の高い苗字だ分かりました。

3. 子供の頃に第二言語を学んだ経験について

私はブラジルで生まれ育ち、日本人祖父母の孫娘・孫娘にあたり、従って三世か四世になります。私の両親は、日本語を習うことなく、すでにポルトガル語を話していた祖父母に育てられました。

その結果、幼少期は、祖父から教えてもらったいくつかの簡単な表現（挨拶や 100 までの数字など）を除いては、日本語に直接触れることはありませんでした。8 歳の時、私はサンパウロの内陸部、日系移民の多く暮らすコミュニティのある「バストス」という町に引っ越しました。

この町では、毎年恒例の日本文化のお祭りが開催され、町内に日本語学校があることを知り、すぐに両親に頼んで入学させてもらいました。引っ越し前、家では日本語が話せませんでしたが、祖父母の話やお祭りなどの伝統行事で使われる日本語や日本という国に憧れ、興味が湧いてきて、私の中ではとても大きなものになっていました。ひらがな・カタカナ、単語、表現、活用などの基本的なことから、文章を構成したり、作文を書いたり、会話をしたり、映像や音楽を理解したりすることができるようになったのは、その日本語学校で学んだからでした。

9～10 歳の最初の時期は、文字や数字、果物や動物などの簡単な単語、形容詞、そして動詞や動詞の活用、日常語などを学ぶことに重点を置いた指導を受けました。この初期の段階では、私の先生（ネイティブの日本人）は、言葉と単語の関連付けを容易にするために、ゲームや遊びなどのギミック(gimmick)や、たくさんの絵を使うことが多かったです。授業は、先生方の教え方にその上手さの魅力があり、私は虜になって、私の語学への関心はますます高まり、いつもとても楽しかったです。週に 2～3 回、学校に通っていましたし、学校が主催する教育・文化イベント（作文コンクール、お絵かき大会、修学旅行、料理教室など）にも熱心に参加していました。

また、幼少期には、ブラジル・ポルトガル語と日本語の単語を混ぜて、子孫や移民の間のコミュニケーションを円滑にする Baachanês（ばあちゃん語：別名コロニア語）についても学びました（例：Pega a mizu(水)：水を取って下さい）。第二外国語として日本語を学んだことで、言語がいかに面白く、異なる言語であっても、語形成されるメカニズムを知って、

言語の面白さにはまり、目から鱗(うろこ)が落ちました。

新しい未知の言語を学ぶことは、楽しいことではありますが、困難なこともありました。中でも、全く新しいアルファベットを覚えるのは大変で、文字を書くことを繰り返したり、ゲームをしたりして、ストレス解消をして、継続していました。また、ポルトガル語と日本語の動詞の活用や文の構造の違いもあり、すぐに理解するのは大変でした。例えば、ポルトガル語や英語と似たような単語は、より簡単に学習できました。お話大会の練習では、ポルトガル語とはイントネーションが異なり、単語の発音で文の意味が変わってしまう(橋や箸のように)ため、単語の発音の練習は格別に難しかったです。

あと、日本語学校以外では、日本語で会話できる友人などがいなかったのも、他の人と一緒に日本語を練習することができませんでした(両親とブラジル学校の友だちの間では)。そのせいで、学習の機会としては、授業と宿題と映画・アニメ・マンガ・ドラマ・音楽・バラエティー番組しかありませんでした。

そのような状況にもかかわらず、私の学びは継続し、人前で話すスピーチ・コンテストに参加して、優勝し、奨学金を得て日本への留学(15歳：JICA 日系社会次世代育成研修, 16歳：JSA 海外高校生による日本語スピーチコンテスト, 21歳：大阪サンパウロ姉妹都市協会のプログラム)を続けてきました。今では、思春期(12歳ころ)までに学んだ言語(日本語と英語)がより存在感を持って頭の中に定着していることを実感し、その言語で考えた、会話をしたりすることが多くなりました。そのおかげで、後から他の言語に興味を持ち、学びやすくなりました。

幼少期に日本語を学んだことは、今でも私の人生に大きな影響を与えています。多くの友人(今でも連絡を取り合ったり、日本語の練習をしたりしています)を作り、数え切れないほどの素晴らしい仕事や個人的な機会を得て(そのおかげで林田先生にも出会うことができました)、私の人格形成に磨きがかかったと言えます。月並みですが、私の人生が豊かになりました。

4. 最後に

小さな頃から新しい言語を学ぶ機会を得られたことをとても嬉しく思っています。特に

日本語は、私の好奇心を満たし、私の感じるアイデンティティにとっても近く、今日まで大きな有益さと喜びをもたらしてくれています。将来、自分の子供ができるときに、言語の勉強を早くから始めるように育てたいと思っています。

日本語を学んだ結果で良い思い出の一つは、繰り返しますが、林田先生とお知り合いになったことです。会話やメールのやりとりですぐにわかるように、林田先生の並外れた知性と博覧強記ぶりにはいつも驚かされます。

林田先生にお会いして、この文章を書く機会を与えていただいたことに感謝し、少しでもお役に立てればと思っています。林田先生、この度はご退職、改めてお祝いするとともに、今後のご活躍を祈念して、筆を擱くことに致します。



写真(上)：2018 年度、大阪サンパウロ姉妹都市協会に招聘され、大阪市役所を表敬訪問

写真(下)：両市交流 50 周年(1969-2019 年)を記念した大阪市訪問団との記念写真

(私の左側は上村秀樹氏で前年度大阪市を表敬訪問した代表で、今回の記念論文集にも寄稿)

私について

- ・ 飛騨マリアジュリア
- ・ 23歳
- ・ ブラジル人
- ・ 日系三世・四世
- ・ 祖母・日本移民者



日本語・日本文化を含む複数・アイデンティティを求めて



私のアイデンティティは何？悩む日々の生活



日系人に対する差別のステレオタイプ・イメージなど



- ・ アイデンティティの特定に苦しみ、悩む私。
- ・ 写真右は黄禍論の被害者(当事者)
- ・ 黒人を支援するプラカード。

